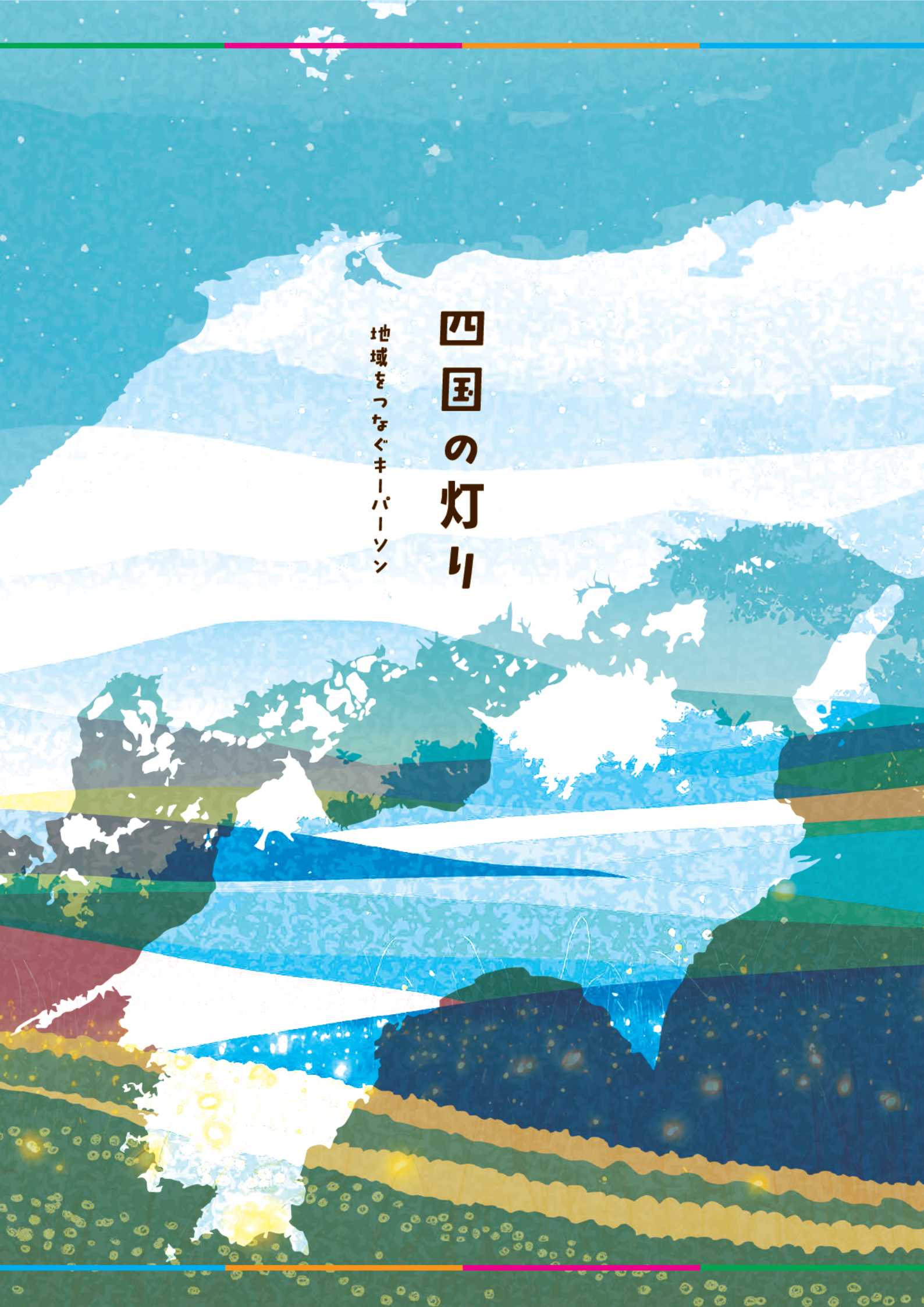


四国の灯り

地域をつなぐキーパーソン



はじめに Introduction

地方創生や地域活性化に関する施策や、先進事例は数多く存在します。

しかし、実際の現場では「誰に相談すればよいのか分からない」「どこから手を付けるべきか」といった課題を耳にすることも多いです。

制度や支援策はあっても、それらを横断的につなぎ、地域の実情に応じてビジョンを共有しながら進行していく存在――すなわち“キーパーソン”の存在が、地域の持続的発展には不可欠です。けれども、制度や支援策と比べると、こうしたキーパーソンの存在は十分に認識されていないのが現状です。

本冊子『四国の灯りー地域をつなぐキーパーソンー』は、四国各地で地域の持続的発展を支えてきた「人」に焦点を当て、自治体、民間事業者、金融機関、支援機関など制度や組織、業種の枠を越えて地域を動かす“キーパーソン”の役割を言語化・可視化するものです。

地方創生の取組において自治体や民間事業者と関わる中で抽出された課題や関心事項を整理し、それらに実践的に向き合ってきた二十一人のキーパーソンの姿を通して、地域の課題解決に向けたヒントや接続の可能性を提示します。

本冊子が、新たな挑戦を始めようとする自治体職員や事業者の方々にとっての“最初の相談先”を見つける手がかりとなり、さらなる連携や共創を生み出す契機となることを目指しています。制度を紹介する冊子ではなく、地域を動かす「人」を可視化すること。それが、本冊子の目的です。



目次 Index

P01-02 はじめに / 目次

P03-04 地図

徳島

TOKUSHIMA

P05-06

- ・ 小柳 秀吉 Hideyoshi Koyanagi (株式会社トリップシード 代表取締役 / あわい商店) 徳島県阿南市

P07-08

- ・ 木村 悠 Hiroshi Kimura (一般社団法人 MUGI OCEAN ACADEMY 代表 / モラスコむぎ) 徳島県海部郡牟岐町
- ・ 柴田 義帆 Yoshiho Shibata (一般社団法人 CoFamily 代表) 徳島県美馬市
- ・ 徳永 聖二 (かめたろう) Seiji Tokunaga (Kametarō) (一般社団法人美波町観光協会 四国の右下・南阿波あんない人) 徳島県海部郡美波町
- ・ 原田 真 Makoto Harada (一般社団法人ネイテック吉野川 代表理事) 徳島県吉野川市

P09-10

- ・ 村山 淳 Jun Murayama (一般社団法人トピカ 代表理事) 香川県高松市塩江町

P11-12

- ・ 池 龍太郎 Ryutaro Ike (株式会社五人百姓 池商店 28 代目) 香川県仲多度郡琴平町
- ・ 黒川 慎一郎 Shinichiro Kurokawa (株式会社ゲンナイ 代表取締役) 香川県さぬき市津田町
- ・ 多田 周平 Shuhei Tada (株式会社サニーサイド 代表取締役社長 / SUNNYSIDE FIELDS) 香川県仲多度郡まんのう町
- ・ 横山 昌太郎 Shotaro Yokoyama (森の案内人・森林インストラクター) 香川県仲多度郡まんのう町

P13-14

- ・ 板垣 義男 Yoshio Itagaki (一般社団法人ゆりラボ 代表理事) 愛媛県上浮穴郡久万高原町

P15-16

- ・ 細羽 雅之 Masayuki Hosoba (株式会社サン・クリア 代表取締役 CEO / 森の国 Valley) 愛媛県松野町

P17-18

- ・ 石川 克晴 Katsuharu Ishikawa (江南ラミネート株式会社 代表取締役) 愛媛県四国中央市
- ・ 植松 孝仁 Takahito Uematsu (株式会社ビジネスアシスト四国 代表取締役社長) 愛媛県松山市
- ・ 大石 一浩 Kazuhiro Oishi (ネットトヨタ瀬戸内株式会社 モビリティ事業部 部長) 愛媛県松山市
- ・ 二宮 敏 Satoshi Ninomiya (株式会社 NINO 代表取締役) 愛媛県松山市

P19-20

- ・ 尾崎 康隆 Yasutaka Ozaki (一般財団法人もりとみず基金 事務局長) 高知県土佐町

P21-22

- ・ 有澤 聡明 Soumei Arisawa (須崎市役所 プロジェクト推進室 次長) 高知県須崎市
- ・ 下村 智也 Tomoya Shimomura (株式会社 KIRECUB 代表取締役) 高知県高岡郡梶原町
- ・ 竹田 真 Makoto Takeda (株式会社 HATA AGE 代表取締役) 高知県幡多郡大月町
- ・ 町田 美紀 Miki Machida (株式会社 VISIONECT 取締役・アートディレクター) 高知県高知市

香川

KAGAWA

愛媛

EHIME

高知

KOCHI

愛媛
EHIME

P18

大石 一浩 Kazuhiro Oishi(ネットヨタ瀬戸内株式会社 モビリティ事業部 部長)
愛媛県松山市

P17

植松 孝仁 Takahito Uematsu(株式会社ビジネスアシスト四国 代表取締役社長)
愛媛県松山市

P18

二宮 敏 Satoshi Ninomiya(株式会社 NINO 代表取締役)
愛媛県松山市

P17

石川 克晴 Katsuharu Ishikawa(江南ラミネート株式会社 代表取締役)
愛媛県四国中央市

P13-14

板垣 義男 Yoshio Itagaki(一般社団法人ゆりラボ 代表理事)
愛媛県上浮穴郡久万高原町

P15-16

細羽 雅之 Masayuki Hosoba(株式会社サン・クリア 代表取締役 CEO / 森の国 Valley)
愛媛県松野町

P21

下村 智也 Tomoya Shimomura(株式会社 KIRecub 代表取締役)
高知県高岡郡梶原町

P19-20

尾崎 康隆 Yasutaka Ozaki(一般財団法人もりとみず基金 事務局長)
高知県土佐町

P21

有澤 聡明 Soumei Arisawa(須崎市役所 プロジェクト推進室 次長)
高知県須崎市

P22

竹田 真 Makoto Takeda(株式会社 HATA AGE 代表取締役)
高知県幡多郡大月町

P22

町田 美紀 Miki Machida(株式会社 VISIONECT 取締役・アートディレクター)
高知県高知市高知
KOCHI

P12

横山 昌太郎 Shotaro Yokoyama

(森の案内人・森林インストラクター)
香川県仲多度郡まんのう町

P12

多田 周平 Shuheii Tada

(株式会社サニーサイド 代表取締役社長 / SUNNYSIDE FIELDS)
香川県仲多度郡まんのう町

P11

池 龍太郎 Ryutaroo Ikee

(株式会社五人百姓 池商店 28 代目)
香川県仲多度郡琴平町

P09-10

村山 淳 Jun Murayama

(一般社団法人トピカ 代表理事)
香川県高松市塩江町

P11

黒川 慎一郎 Shinichiro Kurokawa

(株式会社ゲンナイ 代表取締役)
香川県さぬき市津田町

香川
KAGAWA

徳島
TOKUSHIMA

高知
KOCHI

P07

柴田 義帆 Yoshiho Shibata

(一般社団法人 CoFamily 代表)
徳島県美馬市

P08

原田 真 Makoto Harada

(一般社団法人ネイテック吉野川 代表理事)
徳島県吉野川市

P05-06

小柳 秀吉 Hideyoshi Koyanagi

(株式会社トリップシード 代表取締役 / あわい商店)
徳島県阿南市

P08

徳永 聖二 (かめたろう)

Seiji Tokunaga (Kametarō)

(一般社団法人美波町観光協会 四国の右下・南阿波あんない人)
徳島県海部郡美波町

P07

木村 悠 Hiroshi Kimura

(一般社団法人 MUGI OCEAN ACADEMY 代表 / モラスコむぎ)
徳島県海部郡牟岐町



小柳 秀吉

Hideyoshi Koyanagi (株式会社トリップシード 代表取締役 / あわい商店)
徳島県阿南市

東京と徳島の二拠点で活動する小柳氏。二拠点を行き来しながら、都市と地方をつなぐ役割を10年以上にわたり担ってきました。

小柳氏が徳島に出会ったのは2013年。地域の人々との温かなつながりに触れ、「人が主役の地域づくり」の可能性を感じます。その後、観光プロデュースや民泊支援を行う「TripSeed」を設立し、「人に会いに行く旅」をテーマに、地域で生きる人々の営みや価値を観光として伝える取組を開始しました。

さらに2020年には、地域の産品を丁寧に届ける「あわい商店」の事業に参画。都市部の生活者に向けて、地域の良いものを背景ごと届ける物販を展開しています。あわい商店は単なる物販ではなく、生産者の思いや土地の風土をきちんと伝える場。商品ページは物語のように構成され、「誰が、どんな暮らしの中で、どう作ったのか」を丁寧にお届けしています。

小柳氏の活動の象徴となるのが、徳島・上勝町での阿波晩茶プロジェクト。生産者の高齢化により担い手が減少する中、小柳氏は地元の農家と共に、摘採から仕込みまで本格的に体験できる“オーナー制度”を立ち上げました。企業研修やチームビルディングにも活用され、地域に新しい関係人口を生む取組として注目されているほか、晩茶農家後継者の芽を育む仕組みとしても期待されています。

四国に根づく「信用経済」の文化——“言ったことは守る” “約束を大切に”という価値観を尊重し、生産者一人ひとりと丁寧に向き合う姿勢は、小柳氏の大切にしている信条です。ECであっても手書きの手紙を添えるなど、人の温度を感じるコミュニケーションも欠かしません。





また、金融機関や自治体との連携を通じ、道の駅の改善や地域産品の魅力発信にも取り組むなど、官民を横断した地域活性の実践者としての顔も持ちます。目指すのは、「地域の良いものを、正しい形で都市へ届け、持続可能な地域経済につなげること。」

観光から消費へ、消費から来訪へ——その双方向の循環をつくり、地域と都市が互いに豊かになる未来を描いています。

プロフィール Profile

徳島県阿南市を拠点に活動する地域プロデューサー。観光事業「TripSeed」と地域商社「あわい商店」を通して、地域の魅力を発掘・発信する観光企画や宿泊施設運営、生産者の想いを丁寧に届ける商品販売など、持続可能な地域づくりに取り組む。



木村 悠

Hiroshi Kimura (一般社団法人 MUGI OCEAN ACADEMY 代表 / モラスコむぎ)

徳島県海部郡牟岐町

徳島県牟岐町にあるコミュニティ複合施設「モラスコむぎ」を管理している木村氏は、モラスコむぎを地域の人により楽しんでもらえる施設にするために、さらには牟岐町をより魅力的な地域にするために、様々な取組を企画しています。木村氏と同様に熱量の高い町内事業者も巻き込みながら、牟岐町を盛り上げるため尽力しています。木村氏は徳島県南を拠点にサーフィン、素潜り、SUP、冬山登山で自然アスリートとして活動し

ていますが、国内外から訪れるアスリートに、地元である牟岐町をガイドしながら自然資源の発掘なども行い、“ずっと住んでいるからこそ分かる牟岐町の魅力”を伝え続けています。牟岐町の自然の魅力発信はガイドだけに留まらず、2025年からは消滅の危機にある牟岐町出羽島に2つの会社を夫婦で設立し、古民家の改修、伝統と文化の継承に取り組んでいます。



柴田 義帆

Yoshiho Shibata (一般社団法人 CoFamily 代表)

徳島県美馬市

徳島県美馬市脇町にあるうだつの町並みは、藍の集積地として発展した城下町であり、伝統的建造物の景観が残る町。柴田氏は、うだつを中心とした地域コミュニティづくりと事業創出を行う地域密着型企业「一般社団法人CoFamily」の代表として、古民家5物件を活用したゲストハウス「のどけや」やカフェ、ギャラリーなどを運営しています。ゲストハウスのコミュニティを地域全体につなげ、地域外に広がっていくことで活気ある町をつくりたいという思いで始まり、今では地域住民、移住者、アーティスト、クリエイター、企業、リモートワーカーが自然に集まる交流の場となっています。ほかにも、Web3.0の領域で自ら「オカエリハブ&DAO+」といった全国のコミュニティをネット



ワーク化したプラットフォームを開発、県内外国外で多様なプロジェクトを展開。最近ではイベント企画で町並みの魅力を発信するイベント「脇町うだつレトロマーケット」を開催。うだつの町並みのレトロな雰囲気に合わせて食器、古本、古着、手作り雑貨、フードなど約40店舗が参加し、阿波おどりや大道芸、浴衣の着付け体験なども行われ、約4,000人が来場する新たな町歩きの名物イベントとなりました。柴田氏は、「ないなら作ればいい、人がいないなら呼ばいい、余らせているなら活用すればいい」の精神で地域課題を解決し、まちの未来を作り続けています。



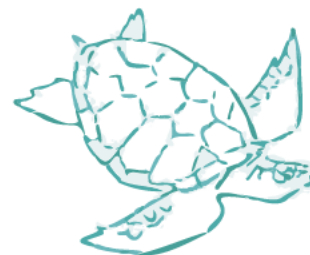
徳永 聖二（かめたろう）

Seiji Tokunaga (Kametarō)（一般社団法人美波町観光協会 四国の右下・南阿波あんない人）

徳島県海部郡美波町

美波町観光協会に所属し、町をPRする“ぬるキャラ”として活躍する人気者。かめたろうというキャラクターは、ウミガメが産卵に訪れる「ウミガメの町」美波町を全国へ広く発信するため、13年前に誕生しました。役場職員を含む地域の人々と連携しながら活動をし、愛らしいルックスと柔らかな語り口が口コミで広がり、今では町のイベントはもちろん、県外の観光PR・展示会などにも多数出演しています。日々の活動は多岐にわたり、観光案内所での来訪者対応、イベント司会、町歩きツアーのガイド、YouTubeでの地域情報発信など、常に全力で美波町の魅力を伝えています。

特に観光客誘致には熱心で、薬王寺・大浜海岸といった名所から地元の穴場スポットまで紹介する独自ツアーを企画し、リピーターを増やすなど地域振興に大きく貢献。役場・観光協会・地域住民が一体となって育んだキャラクターとして、「ゆるく、ぬるく、マイペースに」をモットーにかめたろう氏はこれからも美波町の元気と笑顔を発信し続けます。

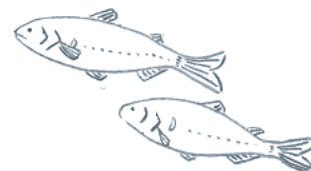


原田 真

Makoto Harada（一般社団法人ネイテック吉野川 代表理事）

徳島県吉野川市

徳島県吉野川市でまちづくり事業を行う一般社団法人ネイテック吉野川の原田氏は、地元を元気にするために地域全体をまちごとデザインするとの思いから、「まちごとデザインプロジェクト」と総称して様々な地方創生の取組を行っています。そのうちのひとつ、「kumuプロジェクト」では、過疎化による人手不足や空き家等の課題を抱える山川町で、アートを使った課題解決を実施しています。地域課題を若手アーティストの制作材料や制作スペースに関する課題と結びつけ、解体業者から出る廃材を制作材料として循環させたり、空き家をアーティストが滞在・創作・展示できる拠点へと改修したり、双方の課題を解決しながら新しい交流や文化の芽を生み出しています。



また、空き家を活用して公民館を設置するプロジェクトも進んでいます。支援学級や不登校の子どもたちがありのままで過ごせる自由な場をつくり、廃材を使ったモノ作りや多世代交流を通して知恵を育み、将来のUターンへとつなげていく計画です。原田氏は、地域の課題を可能性へと変えながら、新しい未来を描き続けています。





村山 淳

Jun Murayama (一般社団法人トピカ 代表理事)

香川県高松市塩江町

2017年、地域おこし協力隊として塩江町に移住した村山氏は、この小さな山あいのまちで「無理なく、幸せに続いていく地域のかたち」を探り続けています。人口減少と高齢化が進み、移住当初、2,800人いた住民が2026年には2,000人を切ろうとしている塩江町。失われたにぎわいを取り戻すのではなく、今の規模だからこそ叶えられる「ちょうどいい暮らし」に舵を切ること。村山氏はそれを「幸福なダウンサイジング」と呼び、地域の知恵と自然の力を生かしたまちづくりを実践しています。

歴史学を学んできた村山氏は、まず地域の来歴を丁寧に紐解くことから始めました。ガソリンカーと呼ばれた鉄道に焦点を当て、設計図をもとに復元した事業や、古民家に眠っていた民具・日用品を読み解き、新たな視点で地域の物語を可視化する取組は、住民が自分たちのふるさとに静かな誇りを抱き直す契機となっています。単に“昔を美化して復活させる”のではなく、長く安定した時代の知恵に学び、現在と未来に活かすために歴史

を見つめ直しています。一方で、塩江の森林や川をフィールドに塩江への愛着を育んでもらいながら、来訪者の想像力や自然観を補っていき、地域と来訪者のつながりを育てる「しおのえ里山学校」は、村山氏の活動の核となるものです。月に一度、子どもも大人も地域の人と一緒に地域で森や川で遊び、言葉以上に“体験”を通じて生まれる信頼は確かなもので、地域に新しい関係人口が育っていく基盤にもなっています。

毎月1回、高松に住む人たちを招いて塩江の自然で遊び、言葉で整理されていない物事を体験として受容することで、人と自然の二項対立では理解できない生態系と人間の関わりを伝えていきます。

塩江の84%を占める山林をどう活かすかも重要なテーマです。村山氏は、放置された広葉樹林の手入れを、観光・エッセンシャルオイル・林業の小規模循環へと結びつける試みを進めています。木を切るだけでは採算が取れない山でも、木漏れ日の美しい山道を歩くハイキングや、クロモジの精油づくりなどの新しい活用方法で経済的な価値を生み出しながら、森の復元力を超えない持続可能な線を見極める方法を模索しています。こうした取組は、



経済活動の外側に出ることで顧みられることがなくなった森を、人の暮らしの関わりの中に戻していく挑戦でもあります。村山氏の活動の根底には、「自分の幸福が、誰かの不幸を前提にしない社会をつくりたい」という強い思いがあります。小さな地域だからこそ、自分の行動がまちに返ってくる。そのフィードバックを確かに受け取りながら、未来のモデルとなるコミュニティを形づくっていかようとしています。村山氏の静かで力強い活動は、地域の未来だけでなく、私たちの社会のあり方にも新しい視点を投げかけています。

プロフィール Profile

香川県高松市塩江町を拠点に、歴史・里山体験・林業循環を組み合わせた地域づくりを進める実践者。地域の来歴を掘り起こし、持続可能な小さなコミュニティのモデルづくりに挑んでいる。



池 龍太郎

Ryutaro Ike (株式会社五人百姓 池商店 28代目)

香川県仲多度郡琴平町

香川県琴平町は、「こんぴらさん」の名で親しまれる金刀比羅宮を中心に、歴史と人情が息づく「顔の見える関係」が残る町です。表参道には785段の石段が連なり、訪れる人々は香川の自然や町の空気を全身で味わいます。その参道69段目に店を構えるのが、鎌倉時代から続く老舗飴屋「五人百姓 池商店」。池龍太郎氏はその28代目です。銀行員・町役場職員を経て家業を継いだ池氏は、地域のプロジェクトに積極的に関わりながら、地域の歴史や文化を次世代へつなぐ語り部として活動。講演や町歩き講座を通して琴平の魅力伝え、聞いた人が誰かに話したくなる「小さな観光大使」を増やすことで、江戸時代の「一生に一度はこんぴら参り」から現代の「人生に何度でも訪れたい町」へとつなげる取組を続けています。さらに、伝統の飴づくりと地域資源を掛け合わせた商品開発

にも取り組み、飴屋の立場から地域の魅力発信と町の活性化を後押ししています。

また、公立図書館がない琴平町で、町内の施設を図書館化する「ことひらまちじゅう図書館」への参画や、若者と協働する地域プロジェクトなど、町全体を学びの場に変える取組も続けています。



黒川 慎一郎

Shinichiro Kurokawa (株式会社ゲンナイ 代表取締役)

香川県さぬき市津田町

香川県さぬき市津田町でまちづくりを行う、株式会社ゲンナイの黒川氏は、過疎化が進む地域に最短で飛び込むため、大学在学中にオンライン授業を活用して地元へ戻り活動を始めました。空き家を改修した一棟貸し宿「まち宿AETE」では、宿だけでなくまち全体を楽しんでもらうため、食事を提供しないかわりに、1人1人にあった地域の情報を提供し、食事や体験等を通してまちの魅力を伝えています。また、津田町にある日本の渚百選に選ばれた砂浜から徒歩30秒の築60年の古民家を再生し、泊まれる図書館「うみの図書館」を開設。海にまつわる本と漂流文庫を集めた独自のコンセプトで、地域住民から観光客まで多くの人を惹きつけ、まちの新たな交流拠点となっています。そのほか、地域事業者とともに「一般社団法人さぬ

き市津田地区まちづくり協議会」を設立し、行政と民間の橋渡しとしても活躍しています。移住促進や事業支援にも取り組み、移住スカウトサービス「SMOUT」を活用した人材募集では、全国から多くの問い合わせを集めています。黒川氏は、津田町を“現代版の港町”として再び人が集い交わる場にすることを目指して活動を続けています。



多田 周平

Shuheï Tada (株式会社サニーサイド 代表取締役社長 / SUNNYSIDE FIELDS)

香川県仲多度郡まんのう町

「個性が共生し、調和が発展を生む」という理念のもと、ホテルや商業施設の清掃事業を中心に、農業、飲食、ゲストハウス運営など多様な事業を展開し、誰もが活躍できる職場づくりを実践しています。

2022年に香川県まんのう町で開いたSUNNYSIDE FIELDSは、クラフトチョコレートとコーヒーの工房・ショップを併設する拠点で、豊かな自然の中で人と人が関わり合う場をつくりたいという思いから誕生し、同社が掲げる理念を体現する、新たな“実験の場”として機能しています。ここでは、



地域の自然や文化に触れながら、ものづくりを通して多様な人が働き、訪れる人々と交わることで、共生の価値を広げる役割を担っています。多田氏は活動を続ける中で、「**地域には課題ではなく宝物がある**」と気づき、今ある魅力を磨いて輝かせる場所としてSUNNYSIDE FIELDSを位置づけています。幅広い事業において、「**個性を活かし合う働き方**」を大切に、多様な背景を持つ仲間がそれぞれの得意を生かして業務に関わり、働くことを通じて社会とのつながりを実感できる場をつくっています。



横山 昌太郎

Shotaro Yokoyama (森の案内人・森林インストラクター)

香川県仲多度郡まんのう町

香川県まんのう町を拠点に、四国ならではの豊かな自然をフィールドとした「森さんぽ」などを企画・開催する森と星の案内人。まんのう町は、大川山をはじめ、四国らしい穏やかな山並みと瀬戸内の風土が近接しており、独自の自然美に触れやすい場所です。横山氏は、季節ごとに表情を変える森や、四国の澄んだ空気が生む星空を舞台に生命の多様性や自然の循環を体感できるツアーを提供しています。植物や鳥の生態、生存戦略といった森の語りを通じて四国の豊かな森が持つ癒しや気づきを丁寧に伝え、動植物たちの多様な生き方にふれることで参加者が「**自分らしい生き方**」を見つめ直す時間をつくっています。さらに、自治体のエコツーリズム推進

や大学での講義など、四国の自然資源を活かした地域づくりや、持続可能な自然利用のあり方を広める役割も担っています。横山氏の活動は、四国の自然が持つ「**やさしさ**」と「**深さ**」を背景に、人が自然とつながり、心の余白を取り戻すきっかけを提供し、その土地ならではの自然と向き合えるガイドとして、多くの人を森と星の世界へ誘っています。





板垣 義男

Yoshio Itagaki (一般社団法人ゆりラボ 代表理事)

愛媛県上浮穴郡久万高原町

広告・クリエイティブ業界で新卒採用プロモーションに携わっていた板垣氏は、東日本大震災を経て価値観が大きく変化し、2012年に家族と共に愛媛へ移住しました。松山の出版社勤務を経て「えひめ移住コンシェルジュ」となり、県内各地の移住者や地域おこし協力隊と出会う中で、人と人をつなぐ“中間支援”の役割に自らの可能性を見いだします。

その延長線上に生まれたのが、久万高原町で起業・創業を支援する「ゆりラボ」です。板垣氏は、町に眠る“やりたい”という小さなタネを見つけ、それを受け止め、実現まで伴走する場としてゆりラボを形づくってきました。開設当初に始まった「ゆりラボアカデミー」には、町内外から多くのチャレンジャーが集まり、プランづくりやプレゼンを通じて数々のプロジェクトが誕生。ゆりラボそのものも、参加者の提案から生まれた拠点です。ゆりラボの特徴は、起業塾のように“成果”を求めない

ことです。副業でも趣味でも構わない、まずは「楽しさ」や「ワクワク」を大事にし、当人が踏み出せるペースで自己実現を支える。心理的安全性を大切に、気軽に話せる空気づくりが前提にあるため、地域住民も自然と集まり、いつしか互いに刺激し合う関係が生まれます。象徴的なのが、金曜夜のコミュニティバル「ヨイラボ」です。ここでは町民が持ち寄った食材が料理になり、会話がアイデアとなり、次のチャレンジにつながっていきます。後に実店舗を構えた「タネマキ食堂」も、こうしたゆるやかな実験の場から育ったプロジェクトです。また、ゆりラボは高校生の探究学習やコミュニティナースなどの活動の母体にもなり、多様な価値観やキャリアに触れる「出会いの場」として若者の視野を広げてきました。板垣氏が大切にしているのは、「人が衝動で動ける環境をつくること」。自らが主役になるのではなく、誰かの「やりたい」を引き出し、そっと背中を押す。予測不能な変化こそが地域を豊かにすると信じ、久万高原町に小さなチャレンジの連鎖を生み続けています。



プロフィール Profile

愛媛県久万高原町の中間支援組織「ゆりラボ」代表理事として、誰もが気軽に集い、挑戦できる地域のプラットフォームづくりに取り組んでいる。衝動や好奇心から生まれる挑戦を歓迎し、人がつながり、自然と新しい企てが育つ循環づくりに尽力している。





細羽 雅之

Masayuki Hosoba (株式会社サン・クレア / 森の国 Valley)

愛媛県松野町

愛媛県松野町の滑床溪谷。海底火山の隆起によって生まれた一帯は、花崗岩の一枚岩を清流が走る稀有な地形で、硬度6という“奇跡の軟水”が湧き出しています。細羽氏は、この地の自然性と風土に魅せられ、家族とともに目黒集落へ移住して6年目を迎えます。コロナ禍以前はホテル事業者として利益と成長を第一に考えていましたが、開業直後の緊急事態宣言で全ての事業が停止。追い詰められる中で「人間は自然の中で生かされている」という価値観に転換し、地域と共に生きる道へ大きく舵を切りました。現在は、滑床溪谷と目黒集落一帯を「森の国 Valley」と位置づけ、初代町長の言葉「この森にあそび、この森に学びて、あめつちの心に近づかむ」を理念に、森・農・食・医・育の5領域で循環型の地域づくりを進めています。農の領域では、自然栽培家・佐伯康人氏の指導のもと、無農薬・無肥料・無除草剤の農法に挑戦。流域域に位置する集落として、清らかな水を下流の四万十川、そして太平洋へとつなぐ“環境のバトン”を大切にしています。

教育の分野では、前川真生子氏による長期野外キャンプ「NAME CAMP」や、通信制高校と連携した学び舎「あめつち学舎」を運営。自然の中で人と共に生きる力、自ら生き方を選ぶ力を育む場づくりに取り組み、都市では見えにくい「人が育つ環境」を地域全体で整えています。

その他にも、地域の助け合いを可視化し、温かな感謝の循環を生み出す仕組みとしてギフトツール「森コイン」を考案。交換価値ではなく“ありがとう”を渡し合うための媒体として活用され、世代を超えた交流とコミュニティの回復を促しています。

人口250人の目黒集落では高齢化が進む一方で、近年は若い移住者や新しい命が増え、世代循環の兆しが見えてきました。細羽氏は、人口増加や都市化を目指すのではなく、“適疎”の規模を保ちながら持続可能な未来をつくることを目標に据えています。森と水、食と暮らし、人の営みが有機的につながる「小さな循環社会」の実証に挑む姿は、人口減少時代の新しい地域モデルとして注目されつつあります。



プロフィール Profile

愛媛県松野町(目黒地区)に移住し、地域一帯を「森の国 Valley」として再生する取組を進める。ホテル経営の経験を持ちながら、自然と共に生きる価値観に共鳴。源流域での暮らしを軸に、持続可能な地域の未来づくりに取り組んでいる。



石川 克晴

Katsuharu Ishikawa (江南ラミネート株式会社 代表取締役)

愛媛県四国中央市

愛媛県四国中央市にあるラミネート加工会社「江南ラミネート株式会社」。石川氏は、社員の幸せが良い会社づくりにつながり、地域の発展や社会全体がよくなることにもつながっていくという信念のもと、人間力を向上させる環境づくりを続けてきました。その想いを、地域の若者にも広く届けたいという願いから、一昨年「四国中央未来塾」を立ち上げました。未来塾の目的は、この街の子どもたちが、地域の未来を自分事として捉え「明るい未来を主体的に創造していく力」を育むことにあります。ふるさと四国中央市を想う中高生、会社経営者、若手社会人が世代や立場を越えて集まり、共に学び合う場となっています。

これまで、「四国中央市のここが好き！」プレゼンコンテストや、中高生による「この街でやりたいこと」企画募集、ベストセラー作家を招いた

講演会など多彩な取組を実施。これらの活動を通じて、子どもたちが四国中央市の魅力と課題に目を向け、挑戦へと一歩踏み出す機会を創出してきました。

江南ラミネート株式会社はこれからも、人を中心に据えた経営と次世代教育に力を注ぎながら、四国中央市の紙産業の発展と明るい未来づくりに貢献し続けます。



植松 孝仁

Takahito Uematsu (株式会社ビジネスアシスト四国 代表取締役社長)

愛媛県松山市

愛媛・四国の魅力ある「ヒト」と「モノ」を全国へ、そして世界へ届けることを使命に、幅広い事業を展開しています。愛媛産品を県外で販売した経験から、地元の良さをもっと多くの人に知ってほしいという強い思いを抱き、先代とともに地域活性化に取り組んできました。

同社では、首都圏・関西圏を中心に全国へ販路開拓支援、新規事業・起業家育成・移住創業、補助金申請サポート、催事・イベント企画運営など、多岐にわたる支援を実施。さらに、民間で四国初となるインキュベーション機能付きレンタルオフィス・自習室の運営を通じ、チャレンジする人々の成長を後押ししています。



また、愛媛県と連携し、県産品を首都圏へ届けるキッチンカー「EHIMEみきゃんずキッチン」の企画・運営にも携わり、食を通じた地域PRにも積極的です。

植松氏は、幅広い人脈や専門家ネットワークを活かし、創業支援や地域ビジネス創出にも力を注いでいます。「愛媛・四国を元気にしたい」という理念のもと、一人でも多くの挑戦者を育み、地域の未来を切り開く存在として活動をしています。



大石 一浩

Kazuhiro Oishi (ネットヨタ瀬戸内株式会社 モビリティ事業部 部長)

愛媛県松山市



愛媛県松山市を中心に展開されるオンデマンド型相乗り交通「おすそわけ交通 (チョイソコ)」の立ち上げから発展に至るまでの過程で、大石氏が中心的な役割を担ってきました。移動手段が限られ外出をあきらめざるを得なかった高齢者や交通弱者の課題に着目し、地域住民・企業・行政・交通事業者など多様な関係者を巻き込みながら、新たな地域モビリティの形づくりに貢献しています。「おすそわけ交通」は、自宅前で乗降できるドアツードア方式、月額3,500円の乗り放題制、地域企業による協賛金で運営を支える独立採算型など、利用者の“外出意欲”を高める工夫が随所に施されています。導入地域では、外出回数や人との交流が増え、40%程度の利用者が「心が元気になった」と回答するなど、

心身のフレイル予防に大きく寄与していることが確認されています。また大石氏は、地域全体を巻き込むプロジェクト設計や、目的意識を明確にしたモビリティの再構築を重視し、その実行力は多方面から高く評価されています。講演活動やシンポジウム登壇を通じて「移動の自由を守る」取組を広く発信し、持続可能な地域交通のモデルづくりに貢献し続けています。



二宮 敏

Satoshi Ninomiya (株式会社 NINO 代表取締役)

愛媛県松山市

愛媛県松山市で、アートを通じて地域と人をつなぐ活動「art venture ehime」のメンバーとして、愛媛の文化や地域課題をアートの力で見つめ直し、新しい価値や関係性を生み出すプロジェクトを実施。特に、東京藝術大学と愛媛県、そして地域住民が連携するこの取組の中で、アートが“特別なもの”ではなく、誰にとっても身近なコミュニケーションの手段として活かされるよう、アーティストと地域、行政をつなぐ地域コーディネーターとして活動。互いの理解を深める場づくりを行い、町の人々が自分の地域に誇りを持てるような関係性のデザインをしている。また、このプロジェクトではアートを通じた人材育成にも取り組む。

若者や地域住民がアートの現場に参加し、対話や体験を通じて新しい視点を得られるようなプログラムづくりを推進。福祉や医療、テクノロジーとも結びついた幅広い連携の中で、誰もが「自分らしくいられる」地域づくりを目指している。アートが人と地域を優しくつなぎ、まちの中に新しい関係と未来を育てていきます。





尾崎 康隆

Yasutaka Ozaki (一般財団法人もりとみず基金 事務局長)

高知県土佐町

一般財団法人もりとみず基金は、四国最大の水瓶・早明浦ダムを抱える土佐町を中心に、「流域」という自然のまとまりを単位として、上流と下流の持続可能な関係をつくるために設立されました。山の9割を森林が占める土佐町では、人口減少や高齢化により林業の担い手が不足し、山の手入れが遅れ、保水力の低下や荒廃が進みつつあります。一方で、下流の都市部は安定的な水資源や生態系サービスを必要としているにもかかわらず、源流域との“つながり方”を持たないまま、暮らしが成り立っています。もりとみず基金は、この断絶を埋め、流域全体の持続可能性を高めるために生まれました。

事務局長の尾崎氏は、土佐町役場でSDGs推進室長として総合計画を担当する中で、「経済・社会・環境を循環させる」というSDGsの本質を地域に落とし込む必要性を痛感しました。特に“水の源流域”という土佐町の特徴を見つめ直したとき、ダムという人工インフラだけでなく、

その上に広がる森林こそが、長期的に水を生み出す根源であることに改めて気づかされたといいます。水循環解析や産業連関表の分析を重ねる中で、山林整備と水資源の安定、そして地域産業の持続可能性は、切り離せない一体のテーマであることが浮かび上がっていきました。また、単に“環境を守る”のではなく、上流側の暮らしが成り立つこと、若い世代が地域に残れることを最優先に据え、流域全体でWin-Winの循環をつくり出すことを目指しています。

日本では、市町村や県境を越えて流域単位で協働する制度がほとんど存在しません。だからこそ、もりとみず基金は、行政・企業・地域など様々なステークホルダーを巻き込んだ仕組みとして設計されました。大豊町・本山町・土佐町・大川村など上流の自治体と、高松市を中心とする下流域が同じ枠組みに参画しようとしている事例は、国内でも前例がほとんどありません。尾崎氏は「行政界という人為的な境界を超えて、自然の境界である流域に立ち返らないと未来は守れない」と語ります。



都市部が蛇口をひねれば当たり前のように水が出る時代は終わりつつあります。気候変動が進むこれからの社会では、“水を飲むときは源を思う”視点が不可欠。上流は生活を守り、下流は自然資本を必要とし、お互いが支え合って初めて流域全体の未来が成り立つ。もりとみず基金は、その循環を可視化し、実装するための挑戦です。



プロフィール Profile

一般財団法人もりとみず基金事務局長として、水源地と都市を結ぶ流域連携を推進し、森林整備や環境教育、成果連動型の資金循環など多様な仕組みづくりに奔走している。



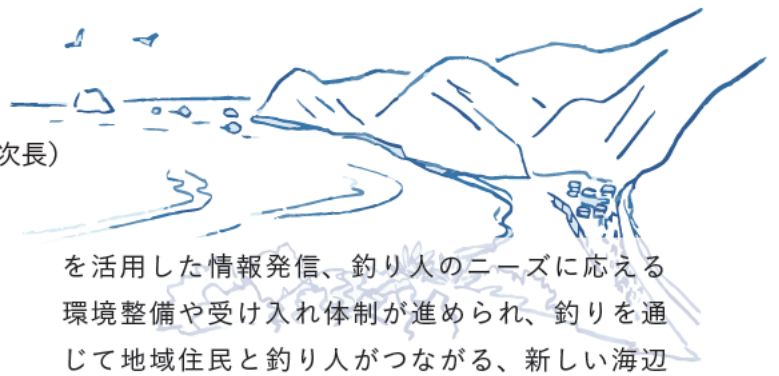
有澤 聡明

Soumei Arisawa (須崎市役所 プロジェクト推進室 次長)

高知県須崎市

須崎市の魅力である“海”を最大限に活かした地域再生の取組「海のまちプロジェクト」を推進している有澤氏。須崎市は四国最大の取扱量を誇る港によって発展してきましたが、近年は津波への不安から海辺エリアが敬遠され、まちの活気が失われつつありました。この課題に対し、有澤氏は駅前や商店街、魚市場など市内を遊園地のエリアに見立て、多彩なアクティビティを配置することで、日常のまちを魅力ある体験の場へと転換しました。開始から4年で年間7万人が訪れるなど、産学官金言の連携により着実な成果を生み出しています。

また、釣り人に世界一やさしいまちを目指した「釣りバカシティプロジェクト」では、漫画『釣りバカ日誌』の元編集者と連携し、キャラクター



を活用した情報発信、釣り人のニーズに応える環境整備や受け入れ体制が進められ、釣りを通じて地域住民と釣り人がつながる、新しい海辺の交流をもたらしています。有澤氏は、豊かな海という地域資源に新たな価値を見出し、海を前面に据えた地域活性化の旗振り役として、須崎の未来を切り開き続けています。



下村 智也

Tomoya Shimomura (株式会社 KIRecub 代表取締役)

高知県高岡郡梶原町

高知県梶原町で森林再生と育林に挑む株式会社 KIRecub の代表。下村氏の取組のきっかけは、両親の故郷である梶原町へ移住して始めた、地域おこし協力隊の活動です。林業の現場で、伐採後に植栽や下刈りが行われず森林が失われていく現状を目の当たりにし、“梶原の森林を守り、未来へつなぐ仕組みづくり”の必要性を強く実感。地域おこし協力隊の仲間と共に KIRecub を立ち上げ、皆伐をして切り株になった山に新たな命を育み、高知県の森林を自分たちの力で再生していくことを目標に、皆伐跡地への植林、下刈り、育苗など、林業のなかでも森林の再生に不可欠な造林・育林に特化したサービスを提供しています。



また、地域住民や子どもたちと協働した苗木園づくり、森林教育の実施、林業×異業種との新しい連携を通じ、林業を“みんなが加わる林業”に変えていく挑戦も進行中です。特にドングリから苗木を育てる取組は、子どもたちが森と関わるきっかけを生み、将来の担い手育成にもつながっています。下村氏は、梶原の豊かな森林を守りながら、林業を通じた活気のあるまちづくりを目指し、林業から広がる地方創生に取り組んでいます。

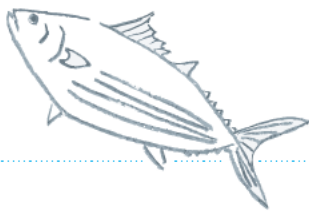


竹田 真

Makoto Takeda (株式会社 HATA AGE 代表取締役)

高知県幡多郡大月町

高知県土佐清水市を拠点に、地方食材の魅力を都市へ届ける「アンテナショップ居酒屋」の事業に参画した竹田氏は、地域食材の発掘・ブランド化や食文化の発信を推進しました。2022年には「株式会社 HATA AGE」を設立し、高知県西部・幡多地域を拠点に地域資源を活用した商品開発・販売を展開。とりわけ、高知の伝統である薫焼き文化を広げるため、カツオに加えブリやタイなど多様な海産物の薫焼きたたきを製造し、鮮度と旨味を活かした商品の提供に取り組んでいます。さらに、地元の養豚場で育てられる豚のブランド化支援や、100年続くブリの一本釣漁の価値向上など、一次産業の持続と地域ブランド創出にも力を注いでいます。



自治体や生産者と密接に連携し、現地の声を直接聞きながら、課題を共有し解決に導く姿勢が竹田氏の大きな特徴です。竹田氏は「**地域には必ず宝がある。それを磨き、未来へつなぐことが地域振興につながる**」と語り、幡多地域の食文化と生産者の魅力を全国へ届けるための挑戦を続けています。



町田 美紀

Miki Machida (株式会社VISIONECT取締役・アートディレクター)

高知県高知市



高知県を拠点に、食と地域の課題解決に取り組むフードエディットカンパニー株式会社 VISIONECT 代表の町田氏は、産地の逸品を物語化→体験化→収益化へとつなげることで、地域と都市をつなぐ「**おいしい循環**」を生み出す地方創生プロジェクトを展開しています。「**おたべごろ**」は、旬の食材と生産者のストーリーを体験として届ける食のプロジェクト。町田氏が高知各地で出会った生産者や料理人の想いを丁寧に編集し、来場者がその背景にある物語まで味わえる場をつくり出しています。

現在は「**OTABEGORO Kitchen**」として、イベントや企業向けケータリングを通じて、地域の逸品と産地の「**いま**」を都市で体験できる食の場づくりを展開しています。こうした取組を通じて生まれた料理人や生産者のネットワークを基盤に、食材や地域の背景にあるストーリーを編集・発信するコンテンツづくりにも取り組んでいます。町田氏は、料理人・生産者・食べ手をつなぐ関係性を広げながら、地域の食材や文化が継続的に価値を生む食の経済圏の拡大に挑戦しています。



四国の灯り ー地域をつなぐキーパーソンー

経済産業省 四国経済産業局 総務企画部 企画調査課
香川県高松市サポート合同庁舎3番33号 高松サポート合同庁舎北館6階
TEL : 087-811-8507

2026年3月 発行 ※掲載内容・画像の無断転載・複製を一切禁じます。
制作協力（委託事業者）：物語を届けるしごと イラスト：北川企画製作所

